



研究集会を終えて

岡田 直之¹

一年という、センターにとっては長い準備期間を要した「平成10年度情報処理教育研究集会」を、大変な盛況でしかも質の高い内容で終えることができ、職員ともども”ほっと一息”という心境にある。

本研究集会は、全国の大学、短大、高専の教職員が（専門ではない）一般情報処理教育に関して教育の理念、内容、さらには方法等を討論する集会である。学術的討論が第一義であることは勿論であるが、一般情報処理教育を担当する全国の教職員が一堂に会し種々の情報交換やこの分野の現状把握を行うことのできる、唯一の大規模研究集会でもある。文部省と当番大学²が共同で企画するもので、昭和63年に第1回が開催され、今年で第11回目を迎える。奇しくも、第1回は本学で開催され、当番校を一巡して再び本学が当番となる、記念すべき集会である。

当番校が常に頭を悩ます問題は、会場とプログラムである。会場に関する課題は、初日の全体集会と二日目の分科会の会場である。研究集会への参加者は第1回が360名程度であったものが、次第に増加し、今回は700から800名と予測された。これだけの人数を講演のために収容できる施設は、あまり多くなく、本学の場合残念ながら戸畑、飯塚キャンパス、いずれも持ち合わせていない。また十近くの分科会場等を二日間にわたって確保することも、学期中はなかなか難しい。種々討論の末、全体集会は、戸畑キャンパスにおいて記念講堂と大講義室を双方向通信回線で結び、それぞれに大型スクリーン2台を設置して、マルチメディアによる臨場感豊かな分散会場とすることを企画した。また分科会場については、工学部のご好意により、10月23日(金)、24日(土)に7会場を提供いただいた。なお研究集会と平行して開催される、マルチメディアやネットワーク機器の展示会については、幸いにもセンターのロビーを活用することができた。

プログラムに関する課題は、全体集会における基調講演・特別講演と分科会におけるテーマの設定である。情報処理の世界は日進月歩で、この10年間の進歩や変革は著しい。当番校を一巡し、いわば”第2ラウンド”に入ったこの研究集会にふさわしい講演やテーマについて、プログラム委員会等で知恵を絞っていただいた。その結果講演に関しては、情報処理の原点に立ち返って what-to-teach と how-to-teach の観点から、それぞれ吉田将・芸術工科大学長に基調講演を、また竹内章・本学情報工学部教授に特別講演をお願いすることになった。なおこれらとは別に、参加者の方々に九州の歴史、文化にも触れていただくため、高島忠平・佐賀県副教育長にも特別講演を依頼することにした。

¹研究集会担当責任者(情報科学センター長), okada@pluto.ai.kyutech.ac.jp

²この研究集会は、情報処理教育センター協議会のメンバー校、具体的には旧制7大学と、室蘭工業大学、名古屋工業大学、それに本学の10大学が回り持ちで担当することになっている。最近、和歌山大学が新たにメンバー校として加わった。

分科会のテーマについては、論文を投稿するときには区分が分かり易く、実施するときには適度の人数の発表者・参加者が共通の意識の下に討論できることが期待される。過去の研究集会も参考にしつつ、次のような柱を立てた。

1. 情報処理教育の基礎（教育理念、教育システム、システム管理など）
2. 情報処理システムを利用するための教育（リテラシー、ツールの利用など）
3. 情報処理システムを構築するための教育（初級プログラミングなど）
4. 教育を支援するための教育（レポート提出・自習支援ツールなど）

これらに基づいて、最終的に延べ23の分科会場を設定した。なお、特別分科会として、「遠隔授業・セミナー」を設け、Space Collaboration Systemを利用して全国の14大学等を結ぶ遠隔討論会も試みることにした。

研究集会当日は、秋晴れに恵まれ、全国から約740 + 80名のご参加をいただいた（約80名はSCSによる遠隔参加）。昨年の約640名と比べ、かなり増加した。初日の基調講演は、「情報処理と感性」と題して、吉田講師が「これからの情報処理教育は単なるプログラム教育でなく、感性やデザイン力を培うことが重要」と説かれた。また特別講演は、「教育支援のための知的システムとその応用」と題して、竹内教授が「対象知識を組み込んだ、マルチメディアを活用する支援システム」について紹介された。もう一つの特別講演「女王卑弥呼の国？ — 吉野ヶ里遺跡は語る」は、発掘責任者の高島副教育長が邪馬台国論争をユーモアを交えて紹介され、「邪馬台国は九州であった」と力説された。これらは、二つの分散会場で違和感なく聴講することができ、質疑応答も2会場の間で円滑に行われた。また二日目の分科会は、約200件の発表があり、前記4本柱で絞り込んだテーマ毎に集中した討論が行われた。中でも特別分科会は、SCSを統括するメディア教育開発センターからもご参加いただき、遠隔授業の理論と実践を同時に試みる、興味深い内容であった。なお展示会も最新のソフトや機器が18ブースで展示され、終日賑わった。

はじめに述べたように、本研究集会は参加者数ならびに討論内容ともども成功裡に終えることができた、と考えている。これは、大学全体でご協力いただいた賜物といえる。学長には、早い時期から積極的なご指導、ご支援を賜った。両学部長にもよくご理解いただいた。実行委員会ならびにプログラム委員会のメンバーには、直接準備を手伝っていただいた。本部事務局からの大きな支援もあった。情報工学部事務部には、事務作業を分担願った。さらには展示会等での後援会や宿泊交通等での生協の手助けも大きかった。これらの方々に、研究集会担当責任者として厚くお礼を申し上げたい。

最後に、1年にわたって準備作業を進めてくれたセンター職員の努力も小さくなかったことをご披露し、謝意に代えたい。